妙善寺合戰記

解題

妙善寺合戰記　一卷

著者　未詳

此書は、永祿九年、三村元親と宇喜多直家との合戰たる、所謂妙善寺崩の內容を記するものにして、其明禪寺と呼べるは、南北朝の頃此地に明禪寺といふ禪刹ありしによる。而て之を妙善寺と書せるは、蓋字音の轉化によるなり。本書の著者及著作年代は明かならざるも、本文中に『扨澤田の西と八幡村の北の邊にかなたこなたにある首塚は皆此時の塚なるべし』とあるより推せば、遙か後代の者が、他の記錄或は傳說等によりて作せしものなるべし。但し比較的信するに足るものたるは、世既に之を認むる所にして、先人塙保己一の如きも蒐めて、其著群書類從中に收錄したり。

本書、別名を萬燈記と云ふ。其故は、此大戰に於ける陣歿の將士の冥福を、後年湯迫村近傍の者が、山上に松火を焚きて修する由來を記するを以てなり。

妙善寺合戰記（一名万燈記）

著者　不詳

備前・美作・播磨・備中數郡百餘萬石之大守浮田[*一]和泉守直家、備前一國手に不レ入之時、上道郡沼の城に居られける。直家元は當國和氣郡天神山浦上遠江守宗景の臣として、段々自立、終に宗景を押隨て、備前を平均し、剩へ備前の西の方半國を押領しけり。津高郡金川松山[*二]の城主松田左近將監をも方便を以て討取、いきほひ既に近國を壓す。其頃美作國は雲州尼子家の國なりけれども、尼子家は藝州毛利家に押落され、作州に有所の城々も或は藝州に隨ふも有、備前の下知に應ずるも有り。其隙を窺ふて浮田方々を切隨へ、備前をうばひ取ければ、此由毛利家へ聞傳へ、備中松山之城主三村紀伊守家親に被レ申付　作州へ出勢し國中を鎭むべきよしにて、紀伊守一萬餘の人數を催し、作州へ出勢し、浮田に隨ふ城々をば責亡し、浮田後詰あらば無二の戰して討果すべき志也。此由備前へ聞えければ、直家思はれるやうは、今所々の取合最中に、三村は大敵と言ひ、老功の大將にて、たやすく取ひしぎがたき敵なれば、謀を以て討とらんと思はれけるに、其節新參に遠藤喜三郎と云者あり。三村家親未だ備中成羽城主なりける時、喜三郎は浪人にて暫く成羽に居ければ、家親を能具（ヨツツサ）に知りたる事を直家察せられ、遠藤をひそかに閑所へ招寄せ、其方は成羽に有て、家親を能々見知らん。此度三村大軍作州に出勢し、我に隨ふ者どもを責亡すよし。我たとひ後難を得るとても、後詰せずんば有べからず。然共此節所々の敵に國おだやかならず。我多くの勢を以て、彼に敵戰の爲作州に出勢せば、其留守の間を窺ひ、國中に不慮のわざわひ發り、おもはぬ敵おそひ來らん事如何に思へば、いかにもして三村を謀を以て討んとおもふ。汝は案内と云ひ勇士と云ひ、濾（タノミ）に思ふ間、作州に忍び行、能々窺て家親を討とらんやといはれければ、遠藤承り申ける樣、誠に三村此度多勢にて出張の儀に候得ば、我等一人忍入易々と討たん事、十として一つなり。然共かゝる御意を蒙は勇士の眉目として望所に候。不レ叶までも忍入計見候べし。死は近く生は

*一「原本注」此出家像酒折寺平福院に有毎年正月九日に出すよし

*二、松山城は玉松山城の誤

*一、「原注」御遠藤屋敷跡旅所西の方ゑとりといふ所此屋敷跡といふ

*二、「原注」此時大名に取立津高郡虎倉山の城主に成しよし

*一、別本四五百人に作る

堅く候得ば、死後に一子が事奉　賴なりと申、即時に作州に立越ける。喜三郎弟に修理と申者、兄が大事の命を得て作州に赴を聞て助の爲に伴なひける。三村は作州穗村の興禪寺と云山寺にたむろして居けるを、遠藤聞て即夜にまぎれて忍入、彼寺の椽に揚り、障子の紙をつばにて穴を明て見ければ、家臣を集め軍談をして居られける。遠藤鐵炮を差出し打たんとせしに、如何しけん火繩の火消えたりければ、喜三郎弟に申けるは、かく迄忍入しに今迄有し火の消えし事、是弓矢神に捨られしと申ければ、弟の修理申ける樣、御心易かれ火を取可レ參と、居た所を立、夜廻りの士の體にもてなし、或有番所に篝を燒居る所へ行、敵の方の樣に申、油斷なく被　廻候へと申、彼篝火の側へ寄、羽織のすそに火を付、何となく立去り、元の所へ歸り、喜三郎に火を渡しければ、天のあたへと悅び、彼障子の穴より即時に討殺す。座中大きにあわてる間に、遠藤兄弟難なく逃出て備前へ歸る。直家大きに歡び、喜三郎に親恩の知一萬石宛行ひ河內守と名付け、剩へ浮田を名乘せけり。弟修理には三千石加恩せられけり。此事更に知る人なかりけり。されば共三村うたれ、程なく遠藤兄弟過分の高祿を得ける故に、人皆是を察しけり。扨三村が勢は主を討れさわぎけれども、家臣三村孫兵衞と云者老功の者にて、能々人數を鎭て、備中へ歸しける。家親に子息二人有り。一男は備中小田郡猿懸山の城主庄元祐と申ける。是は庄豐前守が養子となり、庄の家を繼にけり。弟は即三村の家を繼で修理亮元親と號し、家親作州にて討れける時は、二人の子供皆備中に有けるが、鬱憤深甚くして如何にも親の讎なれば、備前の國へ亂入して浮田を討果し、遺恨を散ぜんと思ひけれども、備前は大人數、殊更端々に出城多く容易く攻難し、なまじいに軍を發し却て負を仕出しなば、悔とても甲斐あらじと、一族是を諫ければ、不レ及レ力兄弟いかりを押て時節を窺ひけるに、備前上道郡澤田村の西山の上に、妙善寺の城と號して出城有けるを、或時備中より窟竟の勇士四百人を撰びて、夜にまぎれて三棹山より忍び寄、不意に妙善寺の城へ夜討に入る。城中思ひよらず、周章て討るゝ者數を知らず。殘る兵漸々逃落て、城は三村方へ乘とられ、即三村より勝たる勇士の侍大將に、數多軍勢を指添妙善寺の城を堅めさせける。浮田憤怒不レ淺、即責手の人數被レ申付、暫時に妙善寺の城を乘潰し、取返すべき旨下知せられけれ共、城中堅固にして、多勢の勇士ども籠居て持こしらへける故、暫落城せざりけり。直家怒て、自出馬して討ほ

ろぼさんと有ける。此由備中より付置たる忍の士ども松山へ馳歸り告ければ、三村大きに悅び幸と一族中へ觸たりける。兼て約束堅めける舍兄庄元祐、猿懸山の城より出勢す。同國山手幸山の城主石川左衞門尉は、三村が伯母聟成けり。是を初として同國鬼身の城主植木下總守●小田●中島●伊勢抔と云窟竟の勇士、一類一族都合二萬餘の人數を催し、即時に松山を打立、備前國へ押寄、辛川表へ打入ける。かくて浮田は妙善寺の城を責させけれども、落得ざる事をいきどほり、自身亡ばさんと沼の城を打立て、古都の西なる宍甘山鼻に旗の手を飜し今日妙善寺を責落し、籠城の敵どもを一々に撫切にせよと下知せられければ、備中より押寄ける勢、相圖如何にと心を苦しめ、辛川邊にひかへける所へ、又備前に付置たる忍の者立歸り、今日直家彌ゝ沼の城を出馬せられ候よし注進す。三村元親大に悅び、一陣にすゝんで諸勢を勇て云けるは、思ふ計に落て今日妙善寺の城を責るよし。然ば浮田を討取らん事案の內ぞや。某直家が首を刎て亡父の遺恨を散じ、供養にせん。沼の城を乘とらば枝城は風の前のちりのごとく、皆我下風ならんものをと、言葉すゞしく詈て、辛川の宿を打立て先手合を定めける。一手は庄元祐を大將にて、七千計の人數萬成富山の城の下を廻り、春日宮の前より朝日川を打渡り、朝日山の下より丑寅に向て三棹山に打揚り、妙善寺の城の後詰して城中に力を合せ、追手を追散せと向はせたり。一手は石川左衞門尉を大將として、小田●中島以下の勇士五千餘り、首部（ゴウベ）村よりひやけはなを廻り、上伊福村の中道より、今岡山の城の北を通りて、原尾島村へ打出て、直家の本陣に打て掛り、一時に勝負を決せよとなり。惣大將三村修理亮は一萬餘りの人數にて、津島村土生村の前を過て、釣の渡りを打わたり、上道郡國府市場より湯迫山へ打上り、四之御神村の上を越て、宿村の奧觀音寺村へ越、沼の城へ亂入り、直家留守の隙に城を乘取り、直家を眞中に取狹て前後左右より討て可取謀略なり。既に三方の大將相圖の貝鉦（ドラ）打揃へ、旗の手をさつと下し、次第を亂さず打出る。斯て直家は妙善寺の城を責るの謀にて、今備中より大勢寄べきとは思ひよらず。されども妙善寺の後詰として備中より人數や來るらんと、注進のため付置たる物見の士、或は萬成富山の城より注進の者告けるは、備中勢雲霞のごとく押來り、首部村より三手に別れ寄せ來るよし申上る。直家の惣勢、前には妙善寺の城堅固にし未勝負決せず、備中勢數を盡て亂入り、今日合戰有無の二ツと片酢

*一、辛川の宿を打立て首部にて手を分て一手は庄元祐を大將として六千七千の人數云々（イ）

*二、中島加賀守以下の大將數多五千計伊福村の中道より眞一文字に今日岡山の御城の北石關町の邊より原尾島の前まで打續き云々（イ）

*三、乘取りて鐵村へ勢を出し直家を（イ）

を呑で控へたり。偖大將の下知いかにと思ふ所に、また物見の者はせ歸り、急に三方の敵近く候。一手は川下春日宮の前を越え、妙善寺の後詰仕る體に見え申と、云もはてぬに直家立揚り、甲の緒をしめ弓づるをしめし、馬引寄せ打乘て、かゝれ者共妙善寺の城だに落なば、今日備中勢何十萬騎寄たりとも、骸は備前にさらさんぞや。いさめ〳〵と嗔て、一文字に田の中畑の中ともいはせず、二十餘町の道を唯一時に鳥の飛ごとく馳させ、妙善寺の城山へ打登るいきほいなり。此事妙善寺の責手に向ひしもの共は、大將自身後陣より馳來たまふて無二無三に責給ふに、若おくれて先陣の責手どもが責かねば、後陣の者に面を向べきやうもなし。未後陣の繼ざる先に責取れ者共と、諸勢一度にいさみ掛りて責登る。城中にも爰をせんどゝ防戰ひ、かくて直家の本陣も味方の嶮敷所を、はね越え、乘越え責とり、同時に息をも不繼攻たりける。早一二の木戸口破れ、城中引色に成ける。直家自身採弊を取て、既に城は落たるぞ。今一揉ぞと大音聲を揚られける。諸勢一度に鯨波を發し、勝に乘て責鼓を打ち、討ども切どもいとはず、終に城は責落す。城中の兵殘り少なに討れ、殘る兵漸々後の谷を越て西をさして落行ける。直家先本城に火をかけ、煙を揚させ少々人數殘し置き、其身は勝ほこりたる勢を以て、三棹山へ打揚り、逃る敵に追すがふて、山の上より遙に敵の働を見、勝負を一時に決せんと思はれける。先陣は戸川肥後守・花房助兵衛・同志摩守其二三之左右、浮田治兵衛入道安心子息左京亮・岡越後守・長船紀伊守・河本對馬守・同源三兵衛・延原土佐守・岡信濃守・同但馬守等窟竟の家臣を段々に備させ控らる。是を夢にも知らずして備中の三村勢、三方一度に朝日川を打渡り、本陣三村修理亮元親は、湯廹村の前より北の山へ取揚り、早先陣は四ノ御神村の上、矢津の鼻迄打過、我先にと沼の城へ責入り、一時に城を責落し、高名せんと勇ける處に、妙善寺の城はや落城し、煙天につらなりて見えける。三村先陣後陣の勢案に相違しければ、先へも進まず跡へもかへらず。亡然として彳みける。偖春日宮の前をわたりたる庄元祐が勢、是も妙善寺の落城を知らず、後詰のため駒に鞭打馳けるが、既に玉井宮の前を過て、先陣國富村近く押かゝる所に、妙善寺より責落されたる備中勢、右往左往に逃掛け三棹山より崩落ければ、こはいかにと云程社あれ、備へしどろに成にける。直家の先陣戸川・長船・延原・明石等三棹山より勝鬪を作り還り、坂より鐵炮を打掛る。色めき立たる備中勢、人を稍にして

*一、破られければ不叶、城に火を掛て後の山に逃出ける直家本城をば云々（イ）

*二、直家本城をば先手の者共に渡して所々に殘る敵やあるとおさへさせ其身は云々（イ）

*三、彼是數千騎波つれて眞一文字に國富村へ掛落し備中の先鋒を早切崩し合戰を初めける（イ）

*一、別本國富村より德吉の間にて云々

*二、以下數行文章矛盾原本のまゝ

*三、中の手岡山の通を越て來りける（イ）

*四、「原注」元家後兒島にて打ル元家の墓八濱より大崎への海邊に有り

しどろに成ける所を、得たりやかしこしと鎗ぶすまを作り突掛りければ、早先陣の備中勢崩靡て逃かくる。浮田の惣軍勝に乘て鬨を作り、懸れ〳〵とをめきさけんで責たりけり。亂れ立たる習ひ、一陣破て殘黨全からず、備中勢ひた崩立て國富村より德興寺の間にて討るゝ者數をしらず。大將庄元祐は、我が人數の崩靡て逃るをもいとはずして、有岡某と云士と主從五十騎計、國富村の川原を東に向て馬の鼻を立直し、勝ほこりたる浮田が勢の延原土佐守が手へ討てかゝり、縱横追ひまくり、浮田左京亮の朱の四半に兒と云字の馬印を見て、これ直家が一族、望所と小踊して掛合ひ、東西南北へ割立戰ける。元來小勢なる上、數多の敵に打合せければ、大將元祐數ヶ所の疵を蒙り、終に討死せられ、首は左京亮が手へ討取られたり。殘る兵、主の討死に氣を入れ、取て返て我おとらじと一人も殘らず討死す。大將既に討死の上は、亂れ立たる元祐が人數、西をさして落行ける。國富村より朝日川までの間にて、討るゝ者數を知らず。此戰未中半成ける時、中の手に來る石川左金吾が軍勢、漸々原尾島村の前へ來るを、浮田、山の上より見すまして、懸て軍をはじむべきよし下知せられければ、即直家の猶子與太郎元基家を大將として、花房兩家河本父子前後の備を堅め、丸に兒の字の旗數十本、三棹山より北へ向て押下げ、靜に鼓をならして寄たりけり。石川左金吾が副將に友野石見●古屋何某先陣に在けるが、諸手の謀相違して、妙善寺の城落ければ、軍は大事ならん、唯本陣の三村と云老功の勇士等と、軍評定いたしける。早浮田が先陣三棹山をおり下ければ、中々今より軍を返しては、味方負を仕出すべし。掛て軍をはじめ勝負を天運に任せよと、兩陣次第に押寄て、足輕鐵炮打懸たり。浮田與太郎元家は若大將、殊に直家は山の上より見物せられける軍なれば、惣軍に下知して云、一足も引な進め〳〵と打掛り、河本對馬●花房助兵衞兩手より鎗をはじめ、原尾島村を北へ追返しつ、暫揉合ける程に、浮田は勝ほこつたる軍勢の、しかも大將後に控て、勞倦ば我入替らんとするにはげまされ、備中勢は謀相違して南より廻る勢、最早負軍して追立らる有樣を見ければ、後陣あへて進得ず。戰遂に危く見えければ、伊勢新左衞門●中島加賀守以下石川をいさめて、竹田村へ引返し、軍を入給へとすゝめける。左金吾人數を留てひた引に川上へ引登ければ、浮田勢逃るを追ひ、川に添て追上る。直家も三棹山より人數を下し、高屋村に近く出らるゝ。石川が勢は八幡村の邊迄追討に討れて、數

軍殘少く成れ共、伊勢・中島兩人、横合に元家の旗本へ切懸り、浮田勢夥敷討れける。先手備を亂して追ひける浮田が勢の間を取切られければ、裏崩れして雄町村の東へ敗北す。爰にて無恙元親の手へ馳入り、殘る敗軍の士卒は川を渡り、直に備中へ歸る者も多かりけり。惣大將修理亮元親は、兩方の味方の軍勢共が、軍を初て追立らるゝ體を見よりも、續や者共味方に力を合はせて戰へと、云もあへず南に向て、一文字に鞭を揚げて馳せられければ、總軍一度に直家の旗本を目懸突てかゝり、早合戰を初む。元來元親は中國に名を得し勇士、殊更父家親を作州にて討れし恨、今日既にさんぜんと期したる謀相違し、妙善寺の城をあへなく討落され、二方へ相遣したる味方は、負色見へて追立らる。遙に是を見て齒をかみ、眼を廻らして詈ていはく、口惜や我父の怨を報ぜんため、適々大軍を催し出勢せし甲斐もなく、相圖立所に相違せし事天運に違たり。何の時を俟つて恥をすゝがんや。直家が固める陣に無二無三に懸入り、撰討直家を打取か、元親が首を敵に渡すか、二ツの内を過さじ物をと、獨詈て切かゝる。直家の先陣明石飛驒・岡信濃が手を切崩しければ、三村勝に乘て諸軍を勵し、掛や進めや者ども、敵は負色成ぞ、此場を揉立ずんば戰はあやうきものをと、鐙ふんばり下知し、自身手を碎き數刻相戰ふに、直家の諸軍ひらき麾て、既に追立られんと見ける處に、はじめ國富村にて備中勢を追立し、戸川・長船・浮田・延原が勢、竝原尾島邊にて戰し浮田元家の軍勢、敵を退けて漸く隙に成にけるが、三村が勢勝ほこつて旗本危く見えければ、西の方より横合に鐵炮を搏掛〳〵、鎗ぶすまを作て突かゝりける程に、さしも勇士の三村が勢、前後の敵と横より掛る敵に突立られ、ひた崩れに崩れて討るゝもの數を知らず。元親は敗軍にもかまはず、馬の鼻を取て返し〳〵せられけるを、家臣歴々諫謀を加へ、命を全うして重て讎を報ひたまへと謀れども、猶しも掛出で給ふを取付て、唯今討死被成なば、誰人か三村の相續して、先君の仇報じ奉る人候らんと、馬の頭を引返し釣の渡し迄の間にて、危き事多く候得ども、普代の家臣共返し合ひ討死し、終に主をたすけゝる。此合戰に備中勢討死多く、二萬餘の人數殘少なく成にける。是を備前妙善寺崩と云也。直家一代所々の合戰度々なれども、敵を多く亡しけるは此合戰なり。偖三村は是非なく備中へ歸陣して、欝憤不散無念千萬におもひ、毛利家へ訴へいかにもして浮田を討たんと謀ける。直家も毛利家へ段々手を入れ旗本に成、もし天下に

※一、此三村退口にて譜代の家人引返し〳〵主をたすけゝる間今の八幡村の邊にて備中勢討死の數かぞふるに暇なし

※二、此合戰を第一とす直家一代の勝軍なり（イ）

*以下別本妙善寺合戰記に依り追補す

御旗上られば御先手仕らんと申けり。殊更其頃三村方と毛利家と、不快の事出來してむつまじからず。折節浮田よりは三村儀彌々御見放し被ㇾ下ば、御旗先手仕らんと有ければ、望に任せ和談せられ、備前美作を浮田に渡し、無異になられける程に、三村彌々立腹し毛利へ恨を含み、終に松山に籠城しける。家臣三村孫兵衛諷諫（フウカン）しけれども、元親用ひざれば孫兵衛主從の間不快に成て、松山を立去、かくて毛利家大勢を松山へ遣し合戰に及び、三村討負、元親終に切腹し、其後備前と毛利家和談なり。以後毛利家より被ㇾ申越ㇾけるは、日外三村が勢備前へ亂入時分、妙善寺の取合に多くの士卒亡ひし事、皆毛利家へ忠節の者ども、不便なり。跡吊ひ得させ度との御事なり。直家承り即ち大勢の僧を供養し、討死仕ける諸勢の亡魂を吊ひける。依ㇾ之浮田より湯迫村邊の民に申付られ、毎年七月十四日十五日の夜、右湯迫村北後の山に萬燈として數多の火を燈し、生靈を吊給ふ。是より今にいたり不ㇾ懈、萬燈をともし申なり。此時の首塚澤田村の城山の下、八幡村の北、湯迫村の邊に數ヶ所有ㇾ之なり。

龍ノ口の城主最上治部少輔元常は、宇喜多家の妹聟なり。後直家に背て備中方と一つになり、安藝の毛利へ隨ひける。其時、直家より岡郷助と云者に申付、ひそかに郷介手術を以て治部方へ奉公し、後龍ノ口本城北の方の矢倉より治部と組んで落、治部を討取、夫より直家の家臣となる。其比は天正二三年の事也。

上道郡沼の城、始は中山備中守とて、天神山の浦上宗景の家臣なり。後宇喜多直家、備中守を討て沼の城に移り、其後岡山の城へ直家移りて以後は、宇喜多與太郎基家預り也。

御野郡萬成山の城は、富山の城といふ。始は松田左近將監の城也。金川玉松の城へ移りて後、家臣を指置れけるが、松田宇喜多に討れて後、宇喜多直家の弟治部入道安心在城。安心の子左京亮まで在城なり。

同金山の入江船山の城は、須々木豐前守在城也。

奥津高郡虎倉の城は、伊賀左衛門尉久鷹（隆イ）在城也。

妙善寺合戰記終